# 稲 作 情 報 No.29

### 〔大麦栽培管理、水稲栽培方針〕

水田農業レベルアップ委員会技術普及部会(農業試験場、生産振興課、JA経済連、主要農作物振興協会) http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/noushi/inasaku/inasaku.html

- •大麦圃場の排水溝に水が溜まったり、排水溝が崩れている圃場が見受けられます。
- ・溜まった水が速やかに排水されるように、排水溝、排水口を確認して手直しをしておきましょう。
- ・分施体系で大麦の穂肥を施用する場合は、茎数や葉色を確認して施用時期と施用量を判断しましょう。

#### 【大麦 今後の栽培管理】

- •現在の生育は、草丈は県北部では昨年よりやや短く、県南部では長い傾向。
- •茎数は一部の地域を除き昨年より少ない。葉色は昨年よりやや濃い状況。

作 業		作業の注意点									
排水対策	・水が溜まっていたら 排水口に直接繋がる	・排水溝に水が溜まっていないか、溝が崩れて水が流れるのを妨げていないか確認する。 ・水が溜まっていたら、 <u>排水溝に落ちて水の流れをせき止める土をさらう</u> 、枕地に <u>畝を作った場合には畝を切って圃場内部から排水口に直接繋がる排水溝を追加</u> 、するなどして速やかに排水されるように努める。 ・排水口は必ず額縁排水溝の底面より下にする。一般に排水口は水稲の水管理用で高いことが多く、切り下げる必要がある。									
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・2回目の穂肥は1回目の10~15日後に施用する。							]			
(分施体系)	他用か進れて近楽#   上がり硝子質粒率を			グ召軍が	2回目	5以下	2				
		. 12,00				5~6	1				
						6. 6超	0	]			
	【防除時期、薬剤】		時期	薬剤、使用量、使用時期							
(4万千可以阵)		1回目	開花期(出穂期の5日後)	トップジンM粉剤DL 4kg/10a 収穫14日前							
		フークアップ粉剤DL 3kg/10a 収穫14日前   2回目 1回目の7~10日後 (上記以外にも適用薬剤はあります。病害虫防除だよりを参照。)									
(出穂期は全茎の40~50%が出穂した日) ・出穂後、開花期に平均気温が15℃以上で降雨が続くときに多発する。被害粒混入限度0.0%を超えると出荷できない。 ・適期に作業できるように防除の準備を進めておく。											

#### 【2014年産米の結果と2015年産米の方針】

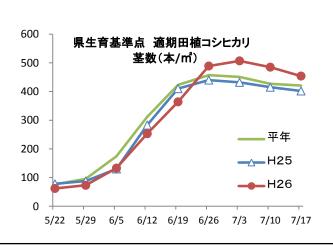
# 項目 内 容 2014年産 米の結果 ・2014年は、県全体の作況指数で98の「やや不良」となった。また、うるち米の1等比率は85.7%(1月末現在)と前年を2.7ポイント上回った。

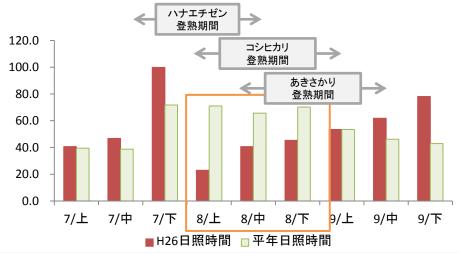
#### 本県の近年の米生産概況

年	2014 (H26)	2013 (H25)	2012 (H24)	2011 (H23)	2010 (H22)	2009 (H21)	2008 (H20)	2007 (H19)	2006 (H18)	2005 (H17)	2004 (H16)	2003 (H15)
作況指数	98	102	100	101	100	97	102	99	100	101	101	93
単収(kg/10a)	510	526	519	523	518	500	529	512	516	522	523	480
1等比率(%)	86	83	88	86	84	89	86	87	82	76	70	83

(北陸農政局公表値、2014年の作況指数は10/15現在、単収は12/24現在、1等比率は1/31現在)

- ・コシヒカリの生育初期は平年より小さく経過したが、7月に入り最高茎数が平年を上回り特に直播で倒伏しやすい稲体となった。
- ・登熟期は日光を受けて葉で光合成が行われて炭水化物が生産され、穂へ転流してデンプンとして蓄積される。
- ・8月の日照時間は、福井で平年比53%(観測史上歴代4位、小浜は平年比39%、小浜は歴代1位)で記録的な日照不足となった。 8月が登熟期間の中心となるコシヒカリは、早生のハナエチゼンや晩生のあきさかりよりも影響が大きかったと思われる。
- ・日照不足の影響をできる限り小さくするには、日光を効率よく受光できる、葉が直立した稲株に育てたい。また、茎数 (穂数) 過剰 で籾数過剰を招いた圃場で減収または品質低下を招きやすい。
- ・これを防ぐには、溝切・中干しによる茎数過剰の抑制と、土づくりを適切に行い稲体を丈夫に育て登熟期間の受光体勢を整えること が重要である。





# 【2014年産米の結果と2015年産米の方針】

項目	内容
2015年産 米の基本方 針	<ul> <li>・本県では、21年産からコシヒカリの移植時期を5月中旬以降に繰り下げる「5月半ばの適期田植え」を実施してきた結果、日本穀物検定協会が実施する2014産米の食味ランキングにおいて、本県産のコシヒカリが3年連続で「特A」評価となった。</li> <li>・2015年産米においても食味ランキング「特A」評価を獲得して定着化を図り、「コシヒカリのふるさと福井米」の評価を一層高める。</li> <li>・そのため、5月半ばの適期田植え、食味検査に基づいた区分集荷、秋の田起こし運動、土壌分析に基づく適切な土づくりを進める。・県では、次期主力品種となる「ポストこしひかり」を平成30年から化学合成資材を5割以上削減した特別栽培で生産を開始する計画である。品種選抜を行う現地実証栽培を平成27年度から始める。地域の特性を踏まえた、生き物にやさしい特別栽培技術確立に向け調査を開始する。</li> </ul>
具体的対策	①土づくり ・良質米産地として、米の作柄・品質を一層安定・向上させるため、稲刈り後の稲わらを土にすき込む「秋の田起こし」を昨年に引き 続き推進する。稲わらを十分腐熟させる時期を守り実践することが重要である。 ・土づくりを効率的・効果的に進めるため、土壌分析結果に基づく土づくり資材の施用を、認定農業者・集落営農組織など担い手農家 を中心に推進していく。一方で、誰にも簡便に土づくりを行う手法として、ケイ酸入り基肥一発肥料の開発に取り組む。 ②コシヒカリ ・「5月半ばの適期田植え」の効果として、コシヒカリの出穂期を遅らせ高温時の出穂を回避することに加え、最高茎数や穂数は少な く 教 数 過剰を抑制できる。 登 熟期の高温 や 乾燥に強く 籾 一粒に養分が一層行き渡る稲体を作り上げ、米の品質を向上させることが可能 と なる。この特性を活かしつつ、土壌環境等に応じた適量の施肥によるタンパク低減や水管理、適期刈取りを一層進める。 ・地域ごとに「特 A 技術普及実証圃」を設置し、地域に適した食味向上技術を実証しながら地域全体に普及させ、「特 A 」評価の一層の定着化を図る。 ③ハナエチゼン ・ハナエチゼンの格落理由で大きいものは斑点米である。カメムシ類の発生と防除について、

# 水稲 これからの管理

作業	作業の注意点											
春耕	地な ・秋耕 ・特に や える	<ul> <li>・秋耕ですき込んだわらの腐熟促進、作土の膨軟化、作土深確保、出芽した雑草埋め込み、などが主な目的。特に湿田や中山間地など稲わらの分解が進みにくい圃場では、秋は浅く耕耘して稲わらの腐熟を促進し春に深耕するのが望ましい。</li> <li>・秋耕時にケイ酸の補給ができなかった場合は、春のなるべく早いうちに施用する。施用時期は田植えの1か月以上前が目安。・特に軟弱な圃場では圃場の四隅(トラクタの旋回場所)が深く、直進走行部分は浅くなって、作土深の不均一化が大きくなりやすい。旋回場所を変更するなどして特定の場所が深くならないようにする。圃場全体で作土深を15㎝確保して、耕盤を揃えるように努める。</li> <li>・ 畦畔からの漏水防止のためモグラやネズミ等の穴がないか気をつける。代かき時には漏水がないように注意して練り固める。</li> </ul>										
作付計画 育苗計画 策定	・収穫作業の目安や1日あたりの田植可能面積などから、田植日を決めてそれを基準に育苗計画、種子予措の日程を計画する。 ・育苗計画は下表を参考に田植計画に合わせて作成する。稚苗箱育苗の場合、播種から移植までの日数は5月上旬移植で20日 程度、5月中下旬移植で15~18日程度。 育苗作業日数の目安(浸種作業日数は水温により変動する)											
		田植時期	浸種	催芽	播種	出芽	緑化•硬化	移植				
		5月上旬稚苗	6~10日	播種前日		2~3日	17~19日					
		5月中下旬稚苗	6~10日	播種前日		2~3日	13~17日		]			
育苗ハウスの準備等	【育苗ハウスの準備での注意点】 ・防風ネット:支柱に曲り等の破損、ネットに破れや穴の有無 ・パイプ: 錆や曲り・折れの有無 ・ピニル: 有滴ビニルの裏表、破れ、光の透過性(補修や交換) ・灌水装置: 灌水装置の欠損、灌水テストによるムラの有無 ・床面の確認: 床面ならしを丁寧に行い育苗箱が浮いたり傾いたりしないか確認、ネズミやモグラ等の穴の有無 ・床の他: 育苗ハウス内に設置する温度計 【4月の育苗】 ・5月上旬移植用ハナエチゼンの育苗期間である4月は、気温が低く日射量が少なくて根張り(マット形成)が悪くなる時もある。 ・気象情報に注意し、①翌朝に霜が降りるような低温が予測される場合はストーブ等で育苗ハウスの保温に努める、②苗を冷やしすぎないよう午後のかん水は行わない、③出芽苗を出芽室から育苗ハウスへ移す際に低温に遭遇させない、に注意する。 【5月の育苗】 ・5月半ばのコシヒカリ適期田植えなど5月中旬移植栽培における育苗管理では、高温による苗の徒長を防ぐため、①育苗床土の肥料を減量(標準1.5g/箱の半量程度で生育を見て追肥が望ましい)する、②育苗ハウスの側面は全開としてハウス内が高温となり過ぎるのを防ぐ、③灌水回数はなるべく控える(特に硬化期前半)、④育苗ハウス内が高温とならないようにハウスのサイド面を全開しても鳥書を回避できるよう育苗ハウスに防鳥ネットを設置、などを行う。 ・5月半ばのコシヒカリ適期田植えでは高温で育苗日数が短縮して根のマット形成が弱くなって機械対応性が低下するので、一般的な基準である126g/箱程度(乾籾・稚苗)よりも播種量を1割程度増量する。 ・育苗期間中に病害が発生、蔓延しやすいので、特に苗いもちや高温で発生しやすい苗立枯病など病害の予防に努める。											

### 水稲 これからの管理

が相 これがらの官珪 										
作業	作業の注意点									
2014年産種子 の状況	・2014年産種子については、籾千粒重(=千籾重)は、ハナエチゼンは前年に比べ小さく、コシヒカリは昨年と同等かやや大きい傾向、あきさかりは昨年よりやや小さい。種子の発芽試験の結果では、発芽率はいずれの品種も前年並、発芽勢は前年よりやや高い傾向となっている。 ・2014年産種子の播種量の目安は、稚苗箱育苗で箱あたり4,600粒~4,700粒播種すると仮定して、ハナエチゼンで131g程度、5月半ばの適期田植えコシヒカリで141g程度(基準量128gの1割増)、あきさかりで128g程度、五百万石で148g程度(いずれの品種も乾籾、箱あたり播種量)となる。・籾千粒重を事前に測定してから播種量を算出することが望ましい。・浸種水温や浸種日数、催芽温度、さらに播種前の種子が鳩胸状態となっていることを確認し、出芽の不揃いとならないよう注意する。昨年は高温登熟条件下ではなく種子の休眠が深くなっている懸念は小さいが、浸種時の水温(浸種開始時の水温は15℃程度)や日数(水温15℃で7~8日)を確保するのが望ましい。 2014年産および近年の水稲種子の籾千粒重(g)									
	年産 2014 2013 2012 2011 2010 2009 2008									
	ハナエチゼン 28.1 29.6 28.0 29.0 27.9 28.5 28.6									
	コシヒカリ 27.5 27.1 27.1 26.2 26.9 27.3 26.5									
	イクヒカリ 28.8 28.3 29.0 28.0 28.5 28.6 27.9									
	あきさかり 27.6 28.1 28.0 28.3									
	五百万石 31.9 32.8 32.2 33.9 31.8 32.4 31.8									
育苗期の病害虫 予測	五百万石 31.9 32.8 32.2 33.9 31.8 32.4 31.8  【ばか苗病】 ・発病最盛期は4月下旬、被害程度は少発、育苗期の発生量は前年並みの予測。 ・比重選や種子消毒(未消毒種子の場合)を行う。 【苗いもち】 ・初発は5月上旬、発生程度は少発、育苗期の発生量は平年より少なく前年並みの予測。 ・比重選や種子消毒(未消毒種子の場合)を行う。温湯消毒を行う場合は、必ず乾もみを使い、処理時の水温や浸漬時間を守る。 【苗立枯病(糸状菌)】 ・初発は4月中旬、発生程度は少発、発生量は平年より少なく、前年並みの予測。 ・育苗床土のp Hや薬剤混和、育苗箱消毒等に注意する。育苗時の温度管理に注意し過剰な低温や高温としない。 【細菌性苗立枯病(褐条病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病)】 ・初発は4月下旬、発生程度は少発、房中発、発生量は平年より少なく、前年並みと予測。 ・育苗期間が高温だと発病には好適となる。比重選や種子消毒(未消毒種子の場合)を行う。育苗床土のp Hに注意する。 ・催芽、出芽時に30℃を超えるような高温にしない。はとむね催芽器を用いる場合、褐条病の発病に注意をする必要がある。 ・温湯消毒を行う場合、褐条病への効果が不十分となるので注意する。 ・組菌性立枯病害では、発病後の防除薬剤はないので予防に努める。									

# 【現地の大麦の生育状況】

品種:ファイバースノウ

	地区	福井	坂井	奥越	丹南 (南越) (丹生)		二州	若狭	県全体
	調査日 (下段は昨年)	3/7 (3/6)	2/22 (2/19)	(3/1)	2/24 (2/20)	3/5 (2/20)	2/18 (2/20)	2/24 (2/20)	2/26 (2/23)
草丈 (cm)	本年	17. 2	12. 4		20. 3	20. 6	18. 3	19. 7	18. 1
	昨年	18. 2	15. 4	14. 3	15. 0	13. 7	13. 4	11. 8	14. 5
茎数 (本/㎡)	本年	544	455		754	615	537	733	606
	昨年	596	724	525	577	542	920	500	626
葉色 (SPAD)	本年	43. 9	50. 5		40. 4	45. 6	42. 6	50. 0	45. 5
	昨年	44. 3	48. 2	43. 2	46. 7	43. 0	44. 4	48. 0	43. 2

地区ごとの調査数、調査場所は年度ごとに変動がある。

